結 yui

八十八膳献穀会　会報　第参号

会員名簿

奉耕会員

大和田　長治　いわき市平中塩
大山　宣雄　いわき市平中塩
大山　公章　いわき市平中塩
加澤　嘉孝　いわき市平中塩
関場　孝和　いわき市平中塩
金子　次夫　いわき市平中塩
黒木　荘一　いわき市平中塩
柴野　茂樹　いわき市平中塩
下藤　吉男　いわき市平中塩
鈴木　正則　いわき市平中塩
鈴木　忠義　いわき市平中塩
関場　喜代司　いわき市平中塩
新妻　政昭　いわき市平中塩
矢吹　平一　いわき市平中塩
八幡　文昭　いわき市平中塩
山下　富康　いわき市平中塩
矢吹　隆平　いわき市平中塩
矢吹　長紀　いわき市平中塩
吉田　甚平　いわき市平中塩
吉田　長久　いわき市平中塩
吉田　亨　いわき市平中塩
吉田　甚博　いわき市平中塩
吉田　吉兵衛　いわき市平中塩
吉田　孝徳　いわき市平中塩
和田　智康　いわき市平中塩

賛助会員

阿辺　栄　いわき市平四ツ波
安斉　生吉　いわき市平下平窪
會川　昇　いわき市平下平窪
内田　進一郎　いわき市平鯨岡
大友　一夫　いわき市郷ヶ丘
大和田　国夫　いわき市平道匠小路
鎌田　誠一　いわき市平下平窪
小泉　武久　いわき市平鯨岡
小松　茂夫　いわき市平久保町
佐藤　孝徳　いわき市江名
桜井　勝昭　いわき市平鯨岡
斎藤　ミチ子　東京都世田谷区
鈴木　昭雄　好間町下好間
鈴木　弘長　いわき市平中塩
鈴木　守応　いわき市平鯨岡
鈴木　貞夫　いわき市内郷高坂町
高田　正昭　いわき市平下平窪
橘　栄一郎　いわき市平立町
遠山　勝久　いわき市平下平窪
根本　満　いわき市平八幡小路
野澤　功　いわき市平作町
藤田　誠　いわき市平下平窪
松崎　典和　いわき市平下平窪
松本　友之　いわき市平材木町
松崎　正一　いわき市平鯨岡
矢吹　正男　いわき市平幕ノ内
吉田　政雄　いわき市平四町目
葉谷　守正　いわき市平下平窪
渡辺　富士夫　いわき市平中塩
野村　みつる　東京都板橋区
吉野　喜昭　いわき市平下平窪
飯島　護　いわき市小名浜
川角　正　いわき市平下平窪
鈴木　隆　いわき市平高月
渡辺　米知　いわき市好間町下好間
渡辺　和歌子　いわき市平八幡小路
氏家　武夫　いわき市東田町
門馬　巌　いわき市平中神谷
合佐毘　雅子　いわき市好間町北好間
木村　雄一郎　宮城県仙台市青葉区
佐藤　久次郎　いわき市自由ヶ丘
山野辺　多寿　いわき市平四ツ波
鈴木　義直　いわき市平下平窪
安藤　哲夫　いわき市平下平窪

特別会員

樫村　弘　いわき市平権現塚
矢吹　貢一　いわき市平童子町
いわき平安閣　いわき市常磐湯本町
里見　庫男　いわき市自由ヶ丘
高萩　現一郎　いわき市平六人町
たかつき保育園　いわき市中央台飯野
坂本　三郎　いわき市常磐西郷町
菊地　留之介　いわき市平下平窪

入会案内

飯野八幡宮 八十八膳献穀会 会員募集

飯野八幡宮の古式大祭で行われる八十八膳献饌神事は古くから連綿と受け継がれてきたもので、県の重要無形民俗文化財に指定されております。

八十八膳献饌神事を永く守り伝えてゆくために、八十八膳献穀会を発足させ、神饌田を設けて、田には糯米を作り、畑では野菜等を栽培し、御神饌として奉納しております。

この御奉仕を通じて、日本の伝統的な農耕儀礼の復元と、風土に根ざした農業文化を、新しい世代が理解してさらに受け継いでゆくことを願っております。なにとぞ、私共の活動をご理解頂き、多くの皆様がご入会くださるようお願い致します。

結yui

発行日　平成十三年五月二十五日
発行所　八十八膳献穀会
〒九七〇―八〇二六
福島県いわき市平八幡小路八十四
飯野八幡宮社務所内
℡〇二四六―二一―二四四四
発行責任者　飯野　光世

田植え前後の祭り

氏家　武夫

真夏の陽光の下、山あいの田んぼの稲はきらきらと輝いて見えた。一枚の田のまん中に木が一本挿し立てられている。こんな情景を目にしたのは、今から四十余年前、私が最初の民俗調査で三和の下三坂地区を訪れたときのことであった。まったくの駆け出しの身で、その木が一体何であるのか、分かるはずもない。近くの農家で尋ねてみると、それは栖の木で田の神さまであるとの答えが返ってきた。田植えの初日に、長さ三間半ほどで枝葉をつけたままの栖の木を、元の方二間ほどは皮をむいて、杭に縛りつけたものだという。田植えのとき、この木に一番先に尻の当たった人は運がいいとか、女性なら子供が授かるという伝承も伴っていた。

こうした稲作に関わる習俗や伝承はこれだけではなく、特に田植えの前後に集中している。田植えそのものが、ただの労働ではなく、神祭りと考えられていたことを物語っていることになるだろう。農作業の開始に先立って、山から田の神さまをお迎えするという習わしは、日本の各地に見られるものであるが、いわき地方に限っても、さまざまな行事が繰り返されていた。二月の山の神講、三月初酉の山遊び、四月八日の山入りなどと続き、苗代に種籾を蒔き終わっての祭りもある。市内の一般的な例をあげると、正月の供え餅の下に敷いた延べ紙を横長に切り、茅の棒につけた旗と、つつじや桜の花を水口に挿し、煎米を撒いて苗の安全と豊作を祈願する。これが水口祭りである。この場合の旗や花は、前述の栖の木と同じく、田の神さまを迎える依代であり、田の神そのものであったと考えられる。

田植えが終わると「さなぶり」である。残り苗を小さな束にして根をきれいに洗い、神棚やかまど神さまに供える。「さなぶり」は「さのぼり」の転訛とされ、「さ」は田の神のことで、田植え終了を見届けた神が、山または天に昇り帰ることから出た言葉といわれている。このように、祭りのたびごとにお迎えした神を、祭りが終わると感謝してお送りするというのが、古くからの神観念であり、「さなぶり」以後収穫祭に至るまで、その都度神を迎え送ることになるのである。

市内のほとんどの田んぼが、あっと言う間に緑色に変わった。農機具などの進歩によって能率は格段にあがり、労働力が軽減された今日、はたして田の神さまは迎えられたのであろうか。変遷激しい世の中で、消え行くもののあるのは已む無しとしても、自然に対する感謝と、超人間的なものへの畏敬の念を忘れてはなるまい。

（いわき市暮らしの伝承郷館長）

内陣献饌に奉仕して

平成十二年九月二十九日　飯野八幡宮八十八膳献穀会の抜穂祭が、中塩斎田で斎行された。

今年は長雨の影響を受け、昨年より若干日程が早まったが、生育は順調であった。

抜穂祭は「ヌキホサイ」または「ヌイボサイ」と読み、田の神の御加護により成熟した稲を秋になって収納する祭儀である。一般には「稲刈り」「刈り入れ」などと言われているように鎌で刈り取るが、古くは石器などで稲穂を抜き取り収穫したため、祭りの名称として今でも伝えられているのである。

飯野八幡宮では八十八膳献饌行事が現在も連綿として斎行している。神饌の内容等は先に述べたと思うので、今回は実際どのように献饌するか、述べてみたいと思う。

九月十五日午前十時例年の如く神輿の渡御が、揚土の御旅所まで行われた。神輿が再び神社に還御されると小休止ののち古式大祭が斎行される。修祓・宮司一拝・御扉開扉と儀式が進み、宮司が御扉側に祇候し、神職、塩垢離総代が各々持ち場に着くと直ちに献饌が行われる。儀式殿で早朝より調理された八十八膳の神饌が唐櫃に納められ、献穀会の会員が白装束に威儀を正し静々と唐櫃を奉舁し向拝で神職に渡し、神職は一旦神饌所で調え神前に進める。

飯野八幡宮の御祭神は三座すなわち、内陣中央に品陀別命（応神天皇）、向かって右に息長帯姫命（神功皇后）、左に比賣神（仲姫）が配されており、神饌は先ず中央の御祭神に御本鉢一台、御餅五枚を一台、御汁一台、御料理九品一台、御菓子四品一台、御盃三献を一台、計六台の神饌が献じられ、引き続き同様に右の御祭神へ、そして同様に左の御祭神へ献じられる。その後御高盛が各々十四台合計六十台の多くの神饌が献じられる。

その後、宮司の祝詞奏上、浦安の舞の奉奏、玉串拝礼と続く。本殿の神事が終わると引き続き若宮八幡社の神事が始まる。若宮八幡社の御祭神は大鷦鷯命（仁徳天皇）がお祀りされており、本殿同様神饌が献じられ、祭典が斎行されるのである。若宮八幡社の例祭がおわると、引き続き末社のお祭りが斎行されるころは、社前では流鏑馬行事がたけなわとなっている。

こうして氏子崇敬者のご協力を得て、古来からの伝統行事が今年も無事に終わることができ、御神慮に叶えられたことと感謝する次第である。

（飯野八幡宮　宮司　飯野光世）

″神饌田″に思う

二瓶　哲

私は三年前に平商に赴任して以来、飯野八幡宮の八十八膳献穀会の皆さんとお付き合いをさせていただきました。

赴任早々、総会の案内や神田での御田植祭等の行事を通して日頃の氏子の皆さんの奮闘振りを拝見してきました。特に私より御年配の方が多いのですが、奥様方を含めて皆さんの真摯な働き振りには、若者言葉で言うなら「これぞボランティア」の原点を見させていただいたとの思いを致す場面が多くありました。

御田植祭では、先ず田んぼを提供した人、田んぼを耕す人がいて、それから御田植えが始まるわけです。昔の代掻きは、最初に三本鍬で起こして乾燥させ、それを砕いて、水を入れて更に細かくしながら田んぼを平らにする。この作業が一番重労働であったのではないでしょうか。今はこの全ての行程を機械で行い、田植えまでも機械化されていて、従来は苗の一本一本を手で植える五月女が最後の出番であったのですが、そういう光景は遠い昔のことになってしまいました。

しかし、本校生の神田での御田植えをしている様子を見ていると、稲穂の国日本の古来からの文化の薫りをそこはかとなく感じました。この情景からは、現代の若者が行っているのではなく、いにしえ人が手数を掛けて稲を育てる、その始まりの大切な行事を行っているかのように感じられました。同時に、厳かな中にも新鮮な美しさを醸し出していて、カメラに収めておきたい気分になったのは私だけではなかったようです。

平商生に、このような伝統文化の継承に係わる機会を与えていただきありがたく思っております。秋の抜穂祭も含めこのような行事を通して、自分が育った故郷を思い、自然の恵みに感謝する心が醸成されれば幸いなことです。生徒を介して、私も会の皆さんと共に楽しい思い出が沢山出来たことに感謝しております。

（前　平商業高等学校長）

献穀会年間行事

四月上旬	八十八膳献穀会　総会
五月中旬	田打祭
五月下旬	御田植祭
八月下旬	〆縄奉製勉強会
九月十五日	飯野八幡宮古式大祭
	八十八膳献饌神事
十月上旬	抜穂祭
十月中旬	芋煮会
十月下旬	研修旅行
十二月下旬	そば打ち
十二月下旬	忘年会
一月上旬	農立て